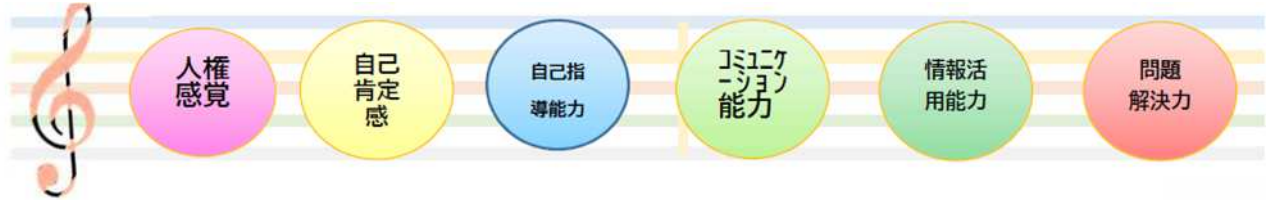




令和5年度 第8号  
常磐野小学校 校長室だより  
令和6年1月26日発行 文責 清川 秀一

学校教育目標

つながり、深まり、未来をつくる子



大寒が過ぎて、寒さも一段と増したように感じます。サザンカ並木が見事に咲き誇り、散った花びらもまたきれいです。

今週は雪が降り、子どもたちは大はしゃぎでした。登校してくる児童の大半は雪玉を大事そうに持っていて、中には両手で抱えている児童も。雪が降るだけで、心がうきうきしているのが伝わってきました。しばらく様子を見てみると、ある児童が雪玉を見せて、「これ、どうしたらいいですか?」と聞いてきました。私は「教室に持って入るとどうなる?」と尋ねると、「とける!」と元気に答えてくれました。続けて「とけたらどうなる?」「びちゃびちゃになる!」とのやりとり。さらに「びちゃびちゃになったら、誰がふく?」と質問すると「・・・謎」と返してきました。そこまで考えるとどうすればよいか自分で判断できたようです。



子どもたちに判断力をつけることは、学校教育の中でつけたい力ですが、判断する力を育てるためには、知識・思考力のほかに、今まで培った経験をつなげる力も必要に感じています。児童が日々経験している何気ない出来事や知識が関連付けられ、新たな知識として蓄積されることで、判断力もついていく

ように思います。しかし、子どもたちの経験することが主体的ではない場合、その経験は価値あるものになりにくいのではないかと思います。主体的とは自分自身で考え行動することで、意欲的な姿勢は幅広い力をつけることができます。

一方、主体性の反対は「指示待ち」や「受動的」、「思考停止」などが挙げられます。そうならないためにどうするかですが、日頃から自分の意見や考えを持つ習慣が大切かと思います。例えば、学校での出来事やニュースなどについて「自分ならどのように考えるか」を言語化するなどです。一緒にテレビを見て感想を聞くのもよいと思います。身近な人との会話から、自分の意見を言ったり、相手の意見を聞いたりすることで視野が広がり、物事に対して主体的に取り組むきっかけになるかもしれません。子どもたちにできるだけ「やらされ感」を感じさせないように上手にもっていき力、大人に必要な力かもしれません。

